

特集

持続可能な地域づくり

「環境にやさしい服づくり」

平野 馨生里 (石徹白洋品店)

○平野馨生里 (かおり) さん (以下、平野) 皆さん、こんにちは。今日はありがとうございます。石徹白洋品店の平野馨生里と申します。この店を始めて、今年でちょうど10年になります。こちらはしばらく倉庫になっていたんですけど、10周年を記念して、服づくりのルーツとなるものを展示するギャラリーにしています。こちらは、私自身が学生時代に文化人類学を学んでいて「聞き書き」という手法でフィールドワークをしていたので、石徹白でおばあちゃんたちから聞いたお話などが展示されています。真ん中にあるのが「たつけ」という服です。これは120年ぐらい前につくられた麻の布を手織りでつくったものです。これをつくったおばあちゃんたちから勉強させてもらって、ここの和服や着物とか浴衣みたいな、民衆の服としてあった動きやすいズボンを、いまのかたちにちょっとアレンジして製作をしています。あちらに布が貼ってあるんですけど、「たつけ」のズボンの裁断図です。普通のズボンは、すごく端切れが出るカーブが多いつくりで、服一個つくると同じぐらい端切れが出て、捨てなければいけない部分が多いんですね。アパレル産業は産業別でいうとCO₂排出量が第2位で、石油産業に次いで多いんですよ。それぐらい皆さんが身に付けているものというのは、つくるときにごみが出るものとか、後か

ら廃棄されるものが多いので問題になっているのです。「たつけ」のように全て直線で、日本の昔の人たちは、ズボンや浴衣、着物以外の暮らしの服というのをつくってきたので、それを継承していまの時代に生かしていくということが、未来にとって大事なのではないかと思って服づくりをしています。あの壁にずっと裁断図と服の説明が書いてあるんですけども、そういったものが本当に四角とか三角だけでできていて、なおかつ動きやすい服というので、広めていきたいなということをつくっています。

○見学者 これが「たつけ」なのですね。

○平野 はい。彼 (平野彰秀さん) がはいているのが「たつけ」というもので、本当に普通にスリムパンツに見えるんですけど、全部直線裁断でできているので、動きやすくて、かつ、ごみが出ないというかたちですね。あと彼が着ているシャツとか、私が着ているチュニックも、これも全部ほぼ直線で作られていて、本当にいまの暮らしに使えるようなかたちにデザインして、ここで藍染とか草木染をして、水を汚さないような染め方で作るということをやっています。隣に藍かめのかめ場とお店があるので、よかったらご覧ください。

(外に出る。お店に移動)

○見学者 ああ、これが藍染。

○平野 そうです。ここで藍の葉っぱを栽培して、でも私たちだけでは栽培できなくて、郡上の他の人にもつくってもらっています。この葉っぱを収穫して、かりかりに乾かしたものを100キログラムぐらいつくる必要があります。それに水を打って、切り返すというのを3カ月すると土みたいになるんですね。それが「葉(すくも)」という藍の染料です。それをこのかめの中に仕込んで、灰の上澄み液の強アルカリの水と一緒に入れることで発酵させて、微生物の働きで染めるという。そういうすごく手のかかる染めです。今日もちょうど染めていて、もう終盤で、9月いっぱいでもいい終わります。ここにあるのが藍の液です。液自体は茶色ですが、中に入れて酸化させることで青くなります。気温が25度ぐらい必要なので、冬はできなくて、夏だけ染めるということで、2日に1回、1日に1キログラムぐらいの糸、布、服などを染めています。

○見学者 藍の栽培はわりと難しいとうかがいますが。

○平野 難しくはないんですけど、石徹白は寒いので、暑いところのほうがやっぱりいいですね。伸びが悪い年はありますが、今年は雨が多かったので、すごくよく育っていますね。

○平野 この建物は、築140年のおうちの解体材と新材と合わせてつくった家です。「石場建て」といって、全部石の上に構造が建っている日本の伝統建築でつくられています。クギはまったく使っていないで、組み合わせているだけなので、また解体できるというつくりで。いま新しい家を1軒建てるのに、これも服と一緒になんですけど、同じぐらい廃棄

されるものとかがあって、やはり家もごみのないつくり方をしたいですよ。建築関係の人がわざわざ見に来られたりするぐらい、いまは珍しい建て方です。昔は当たり前だったんですけど、いまは建築基準法でこういう家が建てられなくなっているので、すごく珍しいみたいです。

○平野 2階はいまウールの冬物が多いんですけど、このウールはブラックメリノといって、ナチュラルなヒツジさんの毛の色を使っています。化学染料は染める職人さんが結構病気になるという話を聞いて、見学へ行くと「劇薬立入禁止」みたいな部屋があったりして、そういう中で普通の服はつくられているということを知って、できるだけそういうものを使わないものを探したら、もともとこういう色の黒いヒツジさん、茶色や白いヒツジさんがいて、それをミックスさせて、このグレーをつくっています。本当にナチュラルな色で、水も汚さないで、暮らしの中に取り入れられる服があるといいなというので、私たちは、藍染とか草木染はするんですけど、ウールに関しては染めない服というのをつくっています。あとは草木染だと、これがクリのいがで染めたグレーです。周りにあるものをもったり拾ったりして、クリの中は食べて、外で染めるみたいな感じで、子どもたちと一緒に拾ったりしながら染めをしています。

○見学者 クリの色からは全然想像できない、きれいな色ですね。

○平野 そうですね。クリは普通に染めると茶色なんですけど、これは鉄媒染といって、鉄をかけていて、鉄も、ごみの日に鉄くずをもらってきて、それをつくって。そうすると、こういうグレーになるという、化学実験みた

いで面白いですね。服はすごく身近で自分を表現するものなのに、値段とデザインと色だけ選んで背景を知らないことが多いというのは、私は疑問だったので、身近に背景が分かる、かつ環境も汚さないという服がつかれないかなと行ってたどり着いたのが、ここのたつけや素材とかっていう感じです。

○見学者 そのへんのズボンは全部、直線仕立てですか。

○平野 そうです。はい。全部直線で作られているので、本当に無駄が出ないし、端切れが出ても四角なので、それを取っておいて、またパッチワークして何かつくれるという、そういうよさがありますね。

○見学者 販売はオンラインが多いんですね。

○平野 いや、対面がやっぱり圧倒的に多いですね。

○見学者 みなさんここまでいらっしゃるのですか。

○平野 ここに来てくださる人もいますし、私たちが展示会とかに出ていくので。うちの服は高額ですし、パンツ類が多いので、やっぱり試着しないとなかなか分からないというので。

○見学者 なるほど。ちなみに、これ1着幾らぐらいですか。

○平野 だいたい3万円からという感じですね。でも長く着られますし、うちはメンテナンスもしているの、ワンシーズンで捨てるみたいなものはまったくつくっていないんですね。

○見学者 一生ものというか、どのくらい使え続けられるものですか。

○平野 いや、直せばちゃんと長く使えと

うか。直すということが、いまはないですもんね。伸びたら捨てるみたいな。うちは伸びないし、直しても使えるというものなので、やはり考え方ですかね。

○見学者 そのへんを含めて、いらっしゃる方はどのくらいいるんですかね。結構、対面でと、こちらの方に来られるお客さんも、遠くからやってこられる方。

○平野 いま予約制でやっているんですけど、月に30組ぐらいですかね。山奥のわりにはたくさん来てくださいますね。

○見学者 その方々は、情報はどこから。ネットで。

○平野 Instagram, Facebook, ホームページですね。チラシを配ったりとか、そういうのはやっていないので。

○見学者 ここの考え方に共鳴されて来られるのでしょうか。

○平野 そうだと思います。まあ、純粋にデザインが好きでみたいな方もいらっしゃいますし、こんな山奥で、どういう服をつくっているのかみたいなこととか。あと、藍染、草木染とか、いろいろなフックはあるので。

○見学者 学んだりもできるんですか、こちらへ来て。

○平野 そうです、冬にワークショップをやっている。2泊3日で、「たつけ」というズボンをつくるというワークショップを年に4回やっていますね。あとはインターン生が夏場ずっといて、最低3週間から滞在してもらって、一緒に藍染をしたり、畑をしたり、服をつくったりして。

○見学者 それは誰かが仲介されているんですか。

○平野 いや、ホームページで募集して、毎

年6, 7人は、ネットがあれば、山奥でも情報発信はできますからね。

○見学者 そうですね。確かに一見なんか高く見えますけれども、長く使う、使える服なので、結局、どっちがね。ぱっと着て、ぱっと捨てるみたいな服の在り方をするよりも、考え方によってはそっちの方が安いのかもしれない。長く使える。

○平野 そうですね。染め直しもやっているのです。色をまた重ねて、違う色を楽しむとか。昔の人は当たり前でそういうことをしていたけど、ここ数十年でそういうのがなくなっちゃったので、本当に布って貴重なものなので、それをどうやって使うかという考え方ですね。ファストファッションもどれぐらいまで続くのかということも分からないですし、環境汚染の問題とかね、いまの考え方をちょっと新しくしていかないとたぶん続かないという危機感がありますね。

○見学者 この布はどこから仕入れているんですか。

○平野 布は、だいたい国内で織られている

ものを仕入れているんですけど。麻は近江が多くて、コットンは、パノコトレーディングという、日本でオーガニックコットンを企画してつくっている会社があって、新潟とか山形とかに機屋さんがあって、そこで織られていて。でも綿自体は、インドだったりアメリカだったり、いろいろなんですけど、オーガニックのものを選んで仕入れていますね。ウールは、オーストラリアのビクトリア州というところにすんでいるヒツジさんですね。

○見学者 これも丈夫そうですね、この靴下。

○平野 実は丈夫じゃないんですよ。ウールはすごく繊細なので、上手に扱わないと結構すぐ穴が開いたりするので、ダーニングしたりとか、あとは手洗いをしたりとか。高いから丈夫というわけでもなくて、やはりメンテナンスとか使い方がすごく大事になってくるので、そういうのもお伝えして使ってもらっています。また皆さん、大人になったら、お金を握りしめて買いに来てくださいね。